

ジョージア (グルジア) 便り その55 ダンサーは修行僧だった?

文 高野陽年 text by Yonen Takano

スマートフォンの中の写真をみかえしていると、ニューヨークのモルガン・ライブラリーで撮った中世の写本が出てきた。金色の文字で写された聖書の一文は、ラピスラズリのブルーがアクセントとなって神々しさを感ずる。ヨーロッパの修道院で写されたものだそう。当時金色の絵の具もラピスラズリの顔料も非常に高価なものであっただろうから、一文字一文字丁寧に清書された跡がみうけられる。一ページを仕上げるのにどれだけの労力を修道士たちはかけたのだろうか。

聖典を写すという作業は東西を問わず神聖なもので、神に身を捧げるものにとつての重要な修行であったのだろう。日本でも写経は修行僧の重要な日課のひとつである。毎朝同じことを繰り返し、教えを写していく。単純作業のようだが、細心の注意を払い、その行為自体が神仏へ通ずるひとつの道であったのだろう。その点において、バレエダンサーは聖職者に重なる。

バレエダンサーの朝はクラスから始まる。ダンサーは突然舞台の稽古を始めるわけではない。毎朝決まったプログ

ラムがあるクラスをこなしてから各々のリハーサルに臨むのだ。クラスはウォーミングアップであり、メンテナンスであり、そしてビルドアップである。どれだけ疲れていても、眠くても、はたまた二日酔いでも朝のクラスは欠かせない。教師の出したコンビネーションを正しく写して自分の体に落とし込むのだ。そのコンビネーションは教師によって多少は違うものの、何世代にもわたって同じプログラムで行われてきた。邪念を捨て、バレエの経典ともいべきクラスに向き合い、基本に立ち返ることでアーティストとしての神髄に近付こうとする行いはまさに修行僧と同じだ。

なぜダンサーは、ほかのアスリートと違って走り込んだり筋肉トレーニングをウォーミングアップ代わりにせず、朝のクラスを日課とするのだろうか。ただ単純に高く飛ぶため、多く回るためであればおそらく筋肉トレーニングやピラティスなどの方が効果的であろう。

舞うという字は巫女が雨を乞い、踊っ

ている姿からできたようだ。ダンサーは神に仕える巫女のような存在でなくてはならない。朝のクラスは肉体的なパフォーマンスの向上を目指すだけでなく、己の魂を芸術に捧げる心構えを保つ神聖な時間なのである。

明日のクラスではラピスラズリブルーのようなアクセントをどこかで入れられるように、余裕を持って臨みたいものだ。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

